

## 審査の結果の要旨

氏名      ホルナゲル ユリア

本論文は、近代の産業遺産を活用した都市内再開発地区における、一般利用者による歴史イメージの認知の特徴について、社会記号論の枠組みを援用しつつ、とくに横浜新港地区を対象にして、実証的に論じた研究である。近代の産業遺産、いわゆる近代化遺産は、近年文化財として広く認知されるようになってきているが、その歴史的価値を継承しながら保全・活用する具体の方法論については、(いくつかの興味深い先例はあるものの) いまだに確立されているとは言いがたい。本研究は、専門家ではない一般利用者に対象を絞り、歴史性がどのように認知されているのか、その特徴を把握することによって、上記の課題にたいする具体の示唆を得ることを目論んでいる。

本論文は、全6章で構成されている。

序論である第1章では、産業遺産の歴史性をいかした都市開発の重要性の認識のもと、研究の目的として、1) 人々がどのようにして再開発後の産業遺産から歴史的意味を理解しているのか、2) 歴史的意味をもたらす空間の特徴を社会記号論を援用して考察すること、3) さらに環境(空間)と意味の相互作用について考察すること、の三点が示されている。そして、横浜新港地区を研究対象とすること、および社会記号論の枠組みを用いる意図について述べつつ、産業遺産再開発地区の歴史性の認知に関する四つの仮説的な問いを提示している。以下本研究は、ここで提示された問いにたいする解答を考察する形で展開される。

第2章は、記号論の基本的な枠組みに関する説明と、関連する既往研究のレビューにあてられている。そのうえで、本研究において社会記号論(都市記号論)を援用することの意義と有効性について論じている。

第3章は、産業遺産の概念とその特徴に関する一般的な知見を整理したうえで、本研究の対象地である横浜新港地区について概要を述べている。

第4章は、産業遺産をいかした再開発地区の歴史的意味を考察するために記号論の枠組みを用いることが有効であることを考察する、理論的なパートである。ここでは、都市空間における歴史的意味のような複雑で抽象的な現象を扱ううえで、意味を分析する体系である記号論が有効である可能性を、多くの既往の知見を引用しつつ論じている。そのなかで、研究の方法論として、アンケートによる定量的分析と、被験者が撮影した写真をもと

に個別にインタビューを行う（Photo Elicitation Interview）定性的分析を組み合わせる行うことが説明されている。

第5章は、続く第6章とともに本研究の核心部である。最初に、ニューヨークのハイラインにおけるアンケート調査により、利用者が歴史的意味を感じる根拠として、過去の機能、新しい材料や建物や各種要素、空間の文脈、の三つのカテゴリーが存在することを明らかにした。次に、横浜新港地区で Photo Elicitation Interview の実験を行い、被験者が歴史性を感じる根拠や要因を、先述の三つのカテゴリーにしたがって詳細に分類を行った。

第6章は、前章の結果に基づく考察である。ここでは、産業遺産の空間に歴史的意味が生じる要因として、1) 過去の機能を想起させる要素や素材の存在、2) (外観は変わっていても) 機能が変わらず存続していること、3) 現代の建物と過去の建物が視覚的対比もしくは連携関係にあること、4) 建物が新しくともその内容（プログラム）が過去を継承していること、の四点がとくに重要な考察として示されている。そして最後に、結論として総括を行うとともに今後の研究の発展の方向性と課題を述べている。

近代を支えた歴史的産業施設が、遺産として、また文化財として認められるようになったのは、比較的最近のことである。保存や活用の方法に関する試行錯誤や事例が豊富な近世以前の歴史的建造物に比べると、そのオーセンティックな価値の特定、保存の方法論、まちづくりに活かすための思想とデザイン論など、産業遺産についてはまだまだ解決できていない課題が多い。そのような状況において、記号論というフレームを用いることによって、産業遺産の空間に歴史的意味がどのように生じるかを実証的に論じ、考察した本研究の社会的意義は大きい。今後、歴史的環境の保全を議論する分野において、近代以降の産業遺産を対象とする議論が増えていくことは確実であり、本研究の成果はその議論にひとつの視座を提供するものである。その意味で、本論文は時宜に適った社会的意義と有用性を備えているものであり、社会基盤学および工学に対する寄与は大きい。

よって本論文は、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以上